

書評

釘貫 亨 著

『「国語学」の形成と水脈』

内 田 智 子

本書は、近代日本語学説史に関する論考集である。日本語研究の近代化を十八世紀後半の本居宣長に置き、二十世紀後半に至るまでの日本語研究の歴史的展開を叙述している。著者の前著『近世仮名遣い論の研究』（名古屋大学出版会 二〇〇七年）を継承し、近代の学説史を大きな一連の流れとして捉えようとする著者の意気込みが感じられる著作である。

本書は十三章からなる。まず、章のタイトルを列挙したい。

- 第一章 近代日本語学説史の提案
- 第二章 本居派古典語学の近代的性格
- 第三章 本居宣長のテニヲハ学
- 第四章 本居宣長の音韻学
- 第五章 明治以降の音韻学
- 第六章 phonology と有坂秀世の「音韻論」

- 第七章 有坂の神保格批判と金田一京助との論争
- 第八章 時枝誠記とソシュール『一般言語学講義』
- 第九章 山田文法における「統覚作用」の由来
- 第十章 国語学とドイツ哲学
- 第十一章 日本文法学における「規範」の問題
- 第十二章 近代日本語研究における教養主義
- 第十三章 専門知「国語学」の創業

各章は著者の既発表論文の内容に加筆修正を加えた形でまとめられているが、それぞれ独立した論考であるにもかかわらず、全体を通して読むと、二百年間の近代日本語研究の流れが太い一本の線につながっていることがわかる。これは、先行学説と後続学説との論理的関係、同時代における学説の影響関係を重視する著者の研究方法によるものであり、このような手法で学説史が描かれたという点において画期的な著作である。

以下、本書の内容を簡単に紹介する。各章すべてを紹介することはできないので、本書のキーワードとなるものを中心にまとめてみたい。

本居宣長の近代的性格

本書前半で論じられるのは、日本語研究において「近代」がいつ始まるのかという点であり、本書はそれを江戸時代の契沖・宣長に置く。宣長の学統鈴屋字派に対し、著者は「中世以来の仮名遣いとテニヲハを最高度に学理編成」し、「彼らの業績が明治以降の国語教育と公文書書式の文法と音声研究の直接の資源として介入した」点に注目する。そしてその点において本居派古典語学は「近代的性格」を持つと述べる。

まず、著者は、院政鎌倉期に生まれた仮名遣いとテニヲハの認識が十七世紀末以降に批判的に再編成されることで、実用語学から古代語解明の学理へのシフトが行われ、「学説史」の叙述が可能になる水準に達したことを述べる。この転換期に位置するのが契沖・宣長であり、ここに一つの画期を見る。次に後世への影響が考察される。契沖と宣長によって示された仮名遣いが、明治政府によって公教育の場で教授され、近代の日本人の書記生活を強制した事実、国学のテニヲハ学が、明治政府が普

通文の規格化を図るにあたっての参照学説となったことを述べる。さらに、強制された仮名遣いは当時の言文一致運動、漢字制限論と複雑に絡み合いながら、仮名遣い改良運動、かなのくわいの結成と分裂、実用問題から思想問題への転化まで引き起こした。まさに近代の社会を動かす原動力となったと言っても過言ではない。

次に著者は宣長の『てにをは紐鏡』と『古今和歌集遠鏡』に注目し、これらに「情報の視覚的開示」という評価を付す。『てにをは紐鏡』は宣長がテニヲハの概念を係り結びとして把握した呼応関係の一覧表である。著者は「図示」という手法を「従来にない斬新な発想」と評価する。一方の『古今和歌集遠鏡』の斬新性は「逐語的俗語訳」にある。従来この二書を関連付けて論じることはいまさらなかったように思うが、著者は「遠鏡」を「テクストを俗語訳によってシンメトリカルに映し出す対照表」と捉え、宣長の手法を「大衆的理解を目指した『見る』学問への転換」と評価する。宣長の「図示」の手法は活用表や口語訳として現代まで継承され、ここにおいても宣長の近代性が明白であると述べる。

最後に、著者が前著の『近世仮名遣い論の研究』から強調するところの「仮名遣いと古代語音声解明」という学理に関連し、宣長の『字音仮名用格』を「日本漢字音

の概念を提案」したものとして評価する。日本漢字音の規定作業を古代音再建の学理の一端と位置付けたのである。

歴史学において一般に宣長の時代は「近世」であり、従来の学説史においてもそのような捉えられてきた。それを著者は日本語研究の流れを概観したうえで宣長を以て画期とした。学理的な面、手法的な面、継承という面、全てから見て納得できる結論である。学説の背景にある思想や後世への影響の考察、俯瞰的な観察など、絶えず全体を見渡すマクロ的視点を持つ著者ならではの見解であると見えよう。

第五章からは、明治以降の学説史が述べられる。近代の学者たちが伝統的日本語研究の継承を自覚しつつ、西洋から流れ込む理論と対峙し、カントやフッサールやマルクスの哲学を援用しながら独自の理論を組み立てていく様子が鮮やかに描き出される。現象学の影響が見られる時枝誠記と有坂秀世、カント哲学の影響がみられる山田孝雄、マルクス主義の影響が見られる教科研学派を「教養主義」という流れの中に捉える一方で、精神主義的要素を言語の外に排除して精密な方法論を発信した橋本進吉を「専門知」としての「国語学」の創業者として

位置付ける。

以下、本書で強調されている日本語研究とドイツ形而上学に関する考察、有坂のプラハ学派批判に絞って簡単に紹介したい。

時枝誠記・有坂秀世と現象学／プラハ学派批判

著者は、行動主義的理論によって伝統的日本語研究の蓄積を守ろうとした人物として、時枝誠記と有坂秀世の二人に注目する。そして二人の理論の形成を助けたのが「現象学」であったことを論じる。

当時、日本語研究者に衝撃をもって迎えられたソシユール理論が、多くの共感や反発を呼び起こす中で、反発の代表格となったのが時枝である。彼はソシユールが言語を「存在」として捉えたのに対し、言語を「行為・行動・過程」として捉えた。著者は時枝がソシユールのラングを経験に先立って予見されたものと批判したことに注目する。そしてこの点において、「対象の実在をあらかじめ前提することを拒絶し、認識主体による経験可能な現象から稠密な実証を施してゆく」現象学との類似性を指摘する。従来時枝と現象学の関係は言及されてはいるものの、時枝の記述に現象学への直接的な言及が存在しないため、明確な形で示されることはなかった。本書が今

回このような形で関連性を指摘したことは意義あることであろう。

一方の有坂は独自の音声理論を作り上げたことで有名な学者であり、その理論は徹底した心理主義的定義で知られる。有坂は主体的経験の確かさだけを根拠にして音声の規定しており、著者はこの点に現象学的な観察態度に通じるものを見る。著者によれば、現象学は人間の認識の限界を自覚して経験可能な領域から分析を加えようとする方法であるが故、前提に主観的経験が存在するという心理主義がある。時枝が有坂の音声理論に全面的な賛同を表明したことも、そこに現象学の影響を見たためではないかと述べる。有坂と現象学の関係性は従来問題とされず、今後の学説史研究に資すること大であろう。

有坂の記述については、第六章、第七章、第八章を通じて、現象学との関連以外にも様々な角度から論じられている。特に有坂のプラハ学派批判に関する考察は注目に値する。有坂は、当時、プラハ学派の phonology が「音韻論」の名で普及することを恐れ、持論を「音韻論」としてプラハ学派批判を行った。著者は有坂の理論的研究に三年間の空白時期があることに注目し、その理由を、「この時期に紹介されたプラハ学派の理論的動向を観察していた」ためと結論付ける。また、有坂がその後沈黙

を破って公表した「Phoneme について」が孤立した論考であること、その記述内容から、有坂のジョーンズ説に対する理解が不正確であったことを指摘する。有坂のプラハ学派批判は「理想と現実を混同した理論」という主張であるが、著者はこの有坂の主張と当時の日本のプラハ学派紹介状況を精査し、有坂が自説を主張するためにプラハ学派の理論を歪曲したことを明らかにした。その一方で、トルベツコイが『音韻論の原理』で音素主義による要素還元が循環論であることを洞察したことを踏まえ、これを読んでいない有坂がプラハ学派の内部矛盾を指摘したことは正当に評価すべきであると述べている。

山田孝雄とカント哲学

山田孝雄は記述文法の確立者として知られる人物である。彼の理論的よりどころは従来西洋論理学や心理学にあると言われてきたが、本書はその深奥にドイツ形而上学のカントの哲学があることを明らかにした。

山田孝雄の文法理論の基本概念として「統覚作用」というものが知られている。著者はこの「統覚」という術語に注目し、この術語が、山田が引用した当時の哲学書のカント哲学を説明した箇所に出現することを指摘する。

このことから著者は、多様な感覚表象をまとめて一つのものと認識させる超越論的統覚を文成立の条件に適用したのが山田の理論であると結論付けた。従来山田の理論的根柢はヴント心理学との関連性が指摘されていたが、本書では、ヴントの心理学成立の背景にカント哲学が認められるという指摘もなされている。

従来解明されなかった山田とカント哲学との関係が論証されたことは、学史上大きな意味を持つであろう。前述の時枝・有坂と現象学との関連性にも照らし合わせ、「近代日本語研究にドイツ形而上学が果たした役割」という方向性を学説史研究に切り開いた功績は大きい。

やや偏った紹介となってしまうが、他にも、戦後の教科研文法学派を生み出す下地を明らかにした、日本文学における「規範観念」の形成と保守に関する論考、教科研文法の単語の定義における循環論の発見等、本書には多くの興味深い事実が収められている。

本書の特徴と意義

本書の最大の特徴は、緻密にしてダイナミックな論理構成にあると言えよう。日本語研究史をこのようなマクロ的な視点で捉えたものは従来あまりなかったように思

う。先行学説と後続学説との論理的関係、同時代における学説の影響関係を重視する著者の研究姿勢は、学説史を大きな一連の流れとして叙述することを可能にした。そしてこの点において本書は、一種の方法論を提示してくれている。同時代の他分野との関連性という横のつながりを見ながら、大きな縦のつながりを記述するという手法は、従来の学説史研究がなかなか成し得なかったものである。伝統的な日本語研究の継承を自覚する人々が西洋の言語学の理論と対峙し、哲学・心理学等を導入して独自の理論を構築していったという枠組みとその研究方法は、近代の学説史研究に新たな時代を切り開くであろう。

斬新さが感じられる問題設定もまた本書の特徴である。契沖・宣長によって行われた実用語学から古代語解明の学理への転換、「聞く」学問から「見る」学問への展開、近世における仮名遣い研究と古代語音声研究とのリンク、日本漢字音研究の意義、有坂のプラハ学派理論の実態、時枝誠記と有坂秀世の記述の類似性、山田孝雄の論理背景にあるカント哲学、教科研文法学派の単語定義に見られる循環論などは皆、従来存在しなかった視点である。

そして本書の最大の功績は、やはり今後の学説史研究に大きな夢を見せてくれたという点にあるのではないか

と思う。近代の学説史研究はまだ十分な記述が行われていない。本書はその大枠を記述すると同時に、この時代の学説史研究が大きな可能性を秘めていることを示唆している。一言で言えば学際的研究の可能性である。これに関連して、以下、私見を二・三述べてみたい。

【洋学との関係】

著者も「洋学文典の音声記述が伝統的音韻学を継承している点については改めて検討に値する問題である」(P.70)と述べているように、伝統的日本語研究と近世の蘭学・英学との関係は今後の学説史研究において追究されるべきテーマであろう。本書は蘭学・英学にはほとんど触れていないが、近世の蘭学・英学は、伝統的日本語研究と近代の日本語研究をつなぐ橋渡しの役割を果たしていると思われる。蘭学者として有名な前野良沢や中野柳圃は明らかに国学者の記述を読んでおり、伝統的音韻学の手法に蘭学の知識を取り入れ、独自の分析を行っている。著者も第二章の「自動詞・他動詞と宣長の『自他』」の箇所で言及しているように、国学文典が蘭学文典に与えた影響は決して小さいものではない。そしてこの洋学者たちの成果は明治の国語文典に流れ込み、西洋言語学導入までの日本語研究を支えている。

一方で、近世の洋学者たちの記述は、幕末のヘボンの登場を通じてさらなる発展を遂げ、明治の英語学習に影響を与えていく。明治以降になって日本人によって編まれた英語文典の記述もまた、当時の日本語研究と深く関わっている。英語音声の発音記述では日本語音との比較が行われ、IPAもいち早く取り入れられた。さらに英語研究が日本語研究に与えた影響も忽せにできない問題である。英語学者として有名な岡倉由三郎は英語学の立場から『日本文典大綱』(明治三十年)という日本語文典を著した。近世の洋学者たちが外国語の知識をもって日本語研究に新たな視点を開拓したのと同様に、近代の英語の専門家ならではの視点は日本語研究に大いに影響を与えたと推測される。英語学者と日本語学者が相互に影響を与えながら、近代の文法記述・音声記述を進展させていった過程は今後の解明が期待される。

【現象学と伝統的日本語研究】

本書で主張されている時枝や有坂と現象学との関係に關しては、より詳しく知りたいところでもある。時枝が現象学に拠ったという点には本人の証言という論拠があるのに対し、有坂と現象学との関係は明確な形では示されていない。もちろん有坂の音韻概念が現象学的態度によっ

て記述されているという主張は納得できるものであり、時枝が有坂の記述に見られる現象学的態度に賛同したという指摘も興味深い。著者が山田の統覚概念がカント哲学に由来することを「統覚」という術語の出所によって証明したように、有坂の記述に関しても明確な論拠となるものが発見できれば大きな成果となるであろう。

有坂以外に、時枝も現象学に傾倒していながら、自らの記述において現象学に一切触れなかった点に関してもその理由が気になるところである。当時の学者のあり方、当時における現象学の受容のされ方、著者も少し触れている西田幾多郎『善の研究』との関連性等が今後解明されるべき課題となるであろう。日本における哲学受容史・哲学研究史との連携による詳しい記述が望まれる。

さて、最も気になるのは、伝統的日本語研究と現象学との関係である。著者によれば、時枝や有坂は「伝統的日本語研究の近代化」を成し遂げた人物であり、伝統的日本語研究の継承を自覚しつつ西洋に対峙したと評価している。つまり彼らは、伝統的日本語研究の継承のために、現象学を必要としたということである。ソシュールの理論の反駁に時枝が現象学の理論を必要としたことは想像できる。ただ、それが伝統的日本語研究の継承を意図していたものであるという論理にはやや曖昧さが残る

ように思う。有坂についても同様である。著者自身、時枝が自らの思索の正当性のよりどころを日本の伝統的言語観に求めた箇所について「主張の通りであるかについては、議論の余地があるう」(P. 183)と述べているわけだが、日本の伝統的言語研究の中に現象学に通じる態度が観察されること、彼らがそれを自覚しており、だからこそ現象学の理論を導入したことが明確な形で証明できれば、彼らの業績により大きな意義が出てくることになるだろう。伝統的日本語研究に現象学との共通点を見るのは、直観的には正しいように思う。この点において、著者が伝統的なテニヲハ学を、テニヲハを駆使する直接的経験として現象学に準え、時枝文法がテニヲハ学を近代化するために現象学を導入したと述べた点は興味深い。なぜ近代学説に導入されたものが現象学でなければならなかったのか。逆にもし日本の伝統的な物事の捉え方の中に現象学との類似性を見ることができれば、当時の日本において「純粹経験」が流行思潮となった事実を理由を供するものともなり得るだろう。

【他分野との連携】

本書が日本語研究に「哲学」という視点を加えたように、今後の学説史は、従来関連性が考慮されてこなかっ

た分野にも目を向けていくべきである。そのような部分にこそ重大な事実が隠されていることを本書は証明している。ここで一つの可能性を示そう。

本書では触れられていないが、昭和五年から昭和十一年にかけて、文部省の要請の下、「臨時ローマ字調査会」の会議が十四回にわたって開催されている。この会議はローマ字による日本語の表記法定を目的としたもので、ヘボン式ローマ字論者と日本式ローマ字論者による論争が行われる。結果、日本式ローマ字が勝利し、訓令式という形で制定される。このことは、従来国語国字改革・国語政策の分野で取り上げられることが多かった。

ここで興味深いのは、この論争において、本書が音声学を日本に紹介した代表格の人物とする神保格がヘボン式ローマ字論の、音韻論を日本に紹介したとする菊澤季生が日本式ローマ字論の中心人物となり、会議の場で「音声学」対「音韻論」の大論争を繰り広げている点である。私見では、この論争において日本式ローマ字が勝利した背景には、日本語音声研究における音声学の理論的敗退がある。神保格が『国語音声学』を著したのが大正十四年、本書で菊澤が音韻論を日本に紹介したとする論文は昭和七年、まさに最先端の理論を駆使して両者は論争を行ったと言える。そして菊澤が音韻論を初めて

紹介したというこの論文が「日本語ローマ字綴り方の立場に就いて」であり、これがローマ字論争の最中に発表されたことは何か象徴的な意味を持つように思われる。このような観点から見れば、ローマ字論争は従来の国語国字改革・国語政策という枠組みから脱却し、日本語の音声研究史としても捉え直されるべきであろう。

これは一例であるが、このような例は他にも数多く存在すると思われる。近代の日本語研究は現代のように細分化されておらず、一人の人物が多方面の研究・記述を行い、国語政策にも深く関わっているためである。

本書は全体的に、従来学史上重視されてきた研究者の論に絞って記述がなされている。もちろん本書はこれまでに紹介してきたとおり、伝統的日本語研究を継承した学者たちが西洋の理論と対峙、あるいは受容しながら日本語研究を立ち上げていくという大きな流れを記述している。しかし近代日本語研究史全体を俯瞰した時、まだ数本の線と点が混在するという段階であろう。今後の学説史研究は、本書が取り上げた学説間の空白を、時間的・内容的に埋める形で進められる必要があると思われる。本書によって、今後の学説史研究が大きく進展していくことを期待したい。

二〇一三年十二月刊、ひつじ書房、A5判、
二八八頁、六、八〇〇円＋税
(うちだ・ともこ／済州大学校)